

宮井家3代の歴史

香川県生まれで国鉄マンの祖父は北海道に入植し、戦前80haの地主であったが、戦後の農地解放で30haになった。昭和41年に祖父が他界した時は、私の父親は長男ではあったものの、諸般の事情で5haからのスタートだった。

この面積は当時の平均であった。その後、血のにじむような努力の結果があり、現在の嫌われる評価がある。

まだ私が25歳くらいの時、知り合いに仕事のヘルプをお願いするために電話で話していたところ、受話器の向こうで「宮井の仕事は手伝わなくてもいい」と話す声が聞こえた。私はすぐ丁寧に電話を切った。

最初は「何かまずいことでも言ったのか？」と考えたが、思い当らなかった。

後で知ったが、その家族は祖父の時代の小作人だったそうだ。多分、時はめぐり再び私に使われるとでも思ったのだろうか。

同じころに、こんなこともあった。その人は当然、私が誰だか知っていたが、決して目線を合わせようとしなかった。言葉も少なく自分の前から早く消えてくれとでもいうような

雰囲気だった。あまりにも不自然な態度だったため、やはり父親に聞いてみた。

「あ、あの人は……」
なんでも祖父の時の小作人で、その時はまだ若くて100%イエスマンだったそうだが、戦後、手のひらを返したような態度に豹変したそうだ。父親の話によると営農に関して十分すぎる援助を行なったと言っていたが、自分は逆の立場になりたくはないと思っ

た。そして**小作人根性**という言葉を知ったのも、そのころであった。

パイオニア精神がある？ この北海道であつても、戦後のドサクサで土地を得た者、特に小作人の立場を利用して法的に土地を取得した者の子孫は、その事実も知らされず、土地や財産を失うことを極端に恐れている。その様は正直、醜さを感じる。戦後、法的に平等になったとはいえ、本当の意味のライバルと言える者を探す努力はムダと理解するのも25歳ころだった。

この寄稿の下書きをしている3月

農地解放を再考す

Vol.4



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約8000万円。

Illustration by Kazushige Akita

10日は東京大空襲の日でもある。

東京・墨田区の住民のみならず、東京全体が焼け野原になったことは皆が知っている。では戦後その跡地に住んでいる人たちは大空襲の以前の人たちと同じなのでしょうか？ 答えは限りなくNOであることに間違いはない。首都・東京でも土地の所有がよい加減な遍歴の下で行なわれたの

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

に、農地をもっと流動的にすることは可能なのだろうか？

NHKのある番組でこんなエピソードを見た。戦後、GHQが地主制度を破壊させる実証として酒田市の大地主の本間家にガサ入れに入ったという。さぞかしあくどく小作人から金銭を巻き上げているのだろう……と思った。が、**事実はずっと違っていた**。本間家は小作人に多くのお金を貸していた帳簿を、すっかり保管していたのである。その借りたお金がどうなったのかはわからないが、戦後の農地解放により全国一律反あたり10円で強制売買になったのだ。

ところで、GHQはなぜこのような農地解放を進めたのか？ 民主主義を広めるために？ それは違う。ある時、米国人農家に聞いてみた。「なぜこのような非効率なことを、日本でやったと思う？」

すると、次のような答えが返ってきた。実は米国は自国の歴史においても、農地解放に似たことをやってきたのだ。

時は南北戦争にさかのぼる。米国南部で白人地主が黒人を奴隷として扱い、搾取してきたことに、当時工業に力を入れていた北部が、建前として黒人奴隷を解放するために立ち上がった。この記述は、中学校の世

界史で習ったことである。では、その後どうなったのか、ご存知でしょうか？ 南部の白人地主が追い出されて黒人が地主になったのでしょうか？ 北部の白人が新地主として組み換わったにすぎないのです。

すべての地主がそうになったわけではないが、建前としては、黒人奴隷を解放したことのみを我々は学校で習った。その結果（奴隷解放）、黒人の農村での社会的地位は上がったのだろうか？

このような話をご存知だろうか。ケンタッキー生まれの黒人青年が、ローマ五輪でボクシングに出場して米国に金メダルにもたらしした。故郷ルイヴィルでは多くの人が、地元出身のヒーローをもてはやしたが、その金メダルの英雄でも、白人専用レストランには入れなかったのです。

その後、その差別を悲痛に思い青年は金メダルを橋の上からオハイオ川へ投げ捨てました（後日、ご本人はこの話は作り話だと語る）。彼の名はカシアス・クレイ、後年のヘビー級チャンピオン、**モハメド・アリ**その人です。

迷うな、農業経営者

私は2年おきに南北戦争当時、中立州ではあったが、ケンタッキー州のルイヴィルで開催される全米で一

番大きな室内ファームショウに行くが、黒人のビジターが、**1日の来場者数5万人のうち1人しか**いない。

この州では人口の30%が黒人である、物の本に書いてあるのに、奴隷から解放されたはずの黒人農家は限りなくゼロという現実を米国では目で見ることができ。

GHQは、戦前の日本を米国南北戦争と同じ状況（奴隷制）と勘違いしたのだろう。大切なのはその当時の日本国民人口7000万人の50%が農民であったため、彼ら彼女たちの頭数が欲しかったのです。

農地解放しなかった欧州の敗戦国はその後、米国に敵対する左翼政権の国が多く誕生した。当時の日本も敵対するソ連、中国になびかれてはまずいと考え、結果的には民主主義の大原則である、頭数の多い小作農民のご機嫌を取ったということなのでしょう。

ただし当時の国土の70%もの面積を占めた林業を解放しなかったのは、頭数（小作林業農家）が少なかつたからなのでしょう。

北海道大学においても育種などをする現場よりも、何もしないで書類で決める左翼思想を前面に出す講義の方が人気があるようです。

結局、現在の左翼農家の多さを見

ると、GHQの行なった農地解放を心から賛美できるのは一体どの誰なのでしょう？

誤解してもらっては困るが、旧小作人には営農能力がないとか、もう一度地主制度に戻せなどと言っているのではない。

私も学校では農地解放は素晴らしいことだと左翼の先生から習った。しかしその結果、国として**大規模農業は夢物語**となってしまう。

国の考えと現場のギャップを埋めるのは誰なのか？ そして農業関連団体、地方の農業行政はすべてその小作人のご子孫の影響力がまかり通る環境となり、ただ政府のみが規模拡大に対して明確な姿勢を出し実行しようとしているが、米国民民主主義の原則である圧倒的な頭数には勝ち目はない。

そのような環境の中で自分はどういうにして規模拡大を進めなければならぬのか、などと迷う必要はない。いずれ米国のように必ず歴史が証明してくれるだろう。

ある大規模生産者と話をした。私の記事を読んでムカつくのはマトモな人だ。

素晴らしいと言う人は**もつとマトモな人**だと。